

# 理系の力が、世界を変える

## 研究に没頭した経験が、世界を形作ってゆく

今や理系が活躍するフィールドは、日本国内だけに留まらない。  
研究を通じて得た知見や姿勢は、世界にも通用する可能性を秘めている。  
世界最大級のODA実施機関である国際協力機構（JICA）で、  
グローバルに活躍する理系出身者の姿から、世界で生きる理系の力を読み解いてみよう。



**国** 国際協力機構（以下JICA）の使命は開発途上国の『国創り』。つまり途上国が抱えるあらゆる課題を解決に導くこと。その事業領域は世界150を超える国と地域に及び、保健医療、農業、都市開発、環境、水、エネルギーなど分野も多岐にわたる。

JICAの掲げるミッションは「Inclusive and Dynamic Development（すべての人々が恩恵を受ける、ダイナミックな開発）」を進めること。理系出身者たちの力によって様々な技術が発展する一方で、その恩恵が世界にあまねく届いているわけではない。JICAは開発途上国のニーズを踏まえながら、技術協力・資金協力などの多様なメニューを駆使して、世界に存在する課題に向き合い続けている。

60年以上にわたる国際協力事業を担い続け、グローバル人材を輩出してきたJICA。そのJICAで世界各国の資源・エネルギー問題に取り組んできた小林香咲氏から、世界を舞台に働くことの意義を聞いた。

### 数多くのステークホルダーをまとめ、合意形成を図る

私は大学院で省エネルギーマネジメントを研究しました。JICA入構後は資源・エネルギー案件の担当部署に配属され、最も力を注いだのが技術協力を通じてマスタープラン（国家戦略）づくりです。JICAでは若手であっても案件のマネジメントを任されるため、バン格拉デシュ、インド、欧州、大洋州（オセアニア）、インドネシアなど、様々な国を担当する機会を得ました。上司や同僚からの指導・助言はありますが、私が動かないと物事が進まない、という一担当者としての



**Profile**  
国際協力機構（JICA）  
人事部 人事課

### 小林香咲（こばやし・かすみ）

大学院では創造理工学研究所において建築学（環境工学）を専攻。2013年入構後、産業開発・公共政策部の資源・エネルギーグループにて、大洋州や途上国のエネルギー支援プロジェクトに従事。2015年より人事部。

気概が求められます。

例えばマスタープラン案件におけるJICA担当者の役割は、クライアントである相手国政府と共に根幹となる構想を立上げるところから始まり、実施中では要所々々様々なステークホルダーを巻き込むことが求められます。省エネルギー政策のマスタープランであれば、相手国政府内だけでも財務省や経済産業省、国土交通省などにあたる多くのステークホルダーが関わってきます。各省庁によって重視するポイントが異なる中で、それぞれの利害を上手く調整し、全体のコンセンサスを形成することもJICAの役割の一つです。

### 大洋州の電力問題に対する支援プログラムを立ち上げ

特に印象深かった仕事に、大洋州における再生可能エネルギー導入プログラムの形成があります。大洋州という一見日本とはかけ離れた世界に思えますが、輸入燃料に依存している点や再生可能エネルギー導入を図るものの、一筋縄ではいかない現状は、島国である日本にとっても重要な問題。特に共通点の多い沖縄などの島しょ地域には、優れた技術や知見が豊富にあ



(上) アジアとヨーロッパの境であるボスボラス海峡を横断する地下鉄用トンネルの建設途中(トルコ)  
 (右) 公共水栓が設置され、安全な水を飲むことに喜び子供たち(カンボジア)



ります。プログラム形成にあたっては、こうした技術・知見を持つ専門家や企業の力を結集しながら、現地へ出張して対象国政府や国際機関と意見交換をし、情報収集と分析を繰り返しました。結果、紙一枚のアイデアから始まったプログラムは、具体的な協力プロジェクトへと繋がっていきました。

**研究テーマに真摯に向き合う姿勢が、世界で生きる**

私が初めて途上国と呼ばれる地域に足を踏み入れたのは、大学院時代に研究でカンボジアを訪れた時です。電気や水がない地域での生活を実際に目にするのは、知識として持ち合わせていることは全くの別物で、衝撃的な体験でした。それをきっかけに、「地球規模のエネルギー問題の解決に貢献したい」と考えて就職活動を行いました。

学生時代の研究で得た知識すべてが仕事に直結するわけではなく、実際の業務では、より深い技術的知識や経済・財務的な視点での理解・分析力、国境を越えて関係者と協働するコミュニケーション能力が求められます。勉強を続ける毎日ですが、データを丁寧に積み上げて分析する姿勢や、興味を持った分野を掘り下げる探求心、全体を俯瞰する能力などは、業務でも活きていると思います。

世界を相手に働く上で、自分が担当するセクターに対する愛着があることは大きな強みです。その点、大学で何らかの研究を行っている方は、そのテーマに対する思い入れがあるはず。私自身、エネルギー問題との関わり方を考え続けています。ひとつのことを成し遂げようとする真摯な思い。それは、世界という広い

舞台に出て行く時の原動力になります。専攻を活かして世界の課題解決をしたいと考えているのであれば、自分の興味に対してしっかりと向き合う中で、将来へと繋がる道が見つかるはずだと信じています。



(上) 大洋州トンガの既設ソーラーパネル  
 (左) 地熱発電開発を支援することで再生可能エネルギーの利用を促進